□本学の特徴ある取組み□

国際医療福祉大学薬学部「先端漢方医薬学教育研究センター」の設立にあたって

武田　弘志*　辻　稔**　北島　政樹***

Ⅰ．はじめに

現代の医療では，各種疾患の複雑化や多様化に対応すべく，西洋医薬学のみならず東洋医薬学の知識や技術に基づいた治療の必要性がうたわれている。例えば，薬物治療の場では，漢方薬がその作用機序の解明が進んできたことを背景として西洋薬の限界や欠点を補うことが多々あり，両薬併用の有用性に関する認識は今後益々国民の間で高まってくることが予想される。このような医療現場での現状を踏まえると，メディカルスタッフを養成する立場にある大学サイドでは，西洋医薬学と共に東洋医薬学に関する教育と研究の体制を充実させることが急務である。一方，本学の薬学部教育は，現代医療の諸問題に対応でき，かつチーム医療に貢献できる人材の育成を目指し，教育カリキュラムの骨太の方針の 1 つとして「基礎医学ならびに臨床医学教育の充実」を掲げてきた。これは，他大学薬学部の教育との大きな違いであり特徴の 1 つでもある。さらに，東洋医薬学的教育としては，東洋医学概論および漢方医学や，漢方知識の基礎となる薬用植物学，生薬学，天然物化学などの教育に取り組んできた。しかし，現代社会で求められているニーズに応えるためには，現行の教育・研究システムでは未だ不十分な面があることは否めない。この度，本学薬学部では，薬学教育が 6 年制教育に移行したことを契機として，西洋医薬学と東洋医薬学の融合による新たな薬学教育・研究基盤の構築を目的とした「先端漢方医薬学教育研究センター」を設立した。本稿では，本センターの今後の活動目標について概説するとともに，昨年末に本センターの開設を記念して実施した市民公開講座の内容についても紹介する。

Ⅱ．「先端漢方医薬学教育研究センター」の活動目標

「先端漢方医薬学教育研究センター」には「教育部門」と「研究部門」の 2 部門を設置し，以下に示す教育・研究活動の実施を予定している。これらの教育・研究活動を通じて，西洋医薬学のみならず東洋医薬学にも精通した薬剤師ならびに薬学者の育成を目指す（図 1）。

1. 教育部門

東洋医薬学に関する知識と技能を系統立てて習得するための環境整備として，本学薬学部における現行の東洋医薬学関連カリキュラムを再考する。

1) 現行カリキュラム

現在，我が国における薬学教育は，日本薬学会が平成 14 年 8 月に制定した「薬学教育モデル・コアカリキュラム」（社団法人日本薬学会ホームページを参照：http://www.pharm.or.jp/rijikai/mcur.html）に準拠して実施されている。このカリキュラムは，薬剤師あるいは薬学研究者等を目指す学生が学ぶべき内容がまとめられたものであり，教養教育から薬学専門教育まで，項目ごとに一般目標（学習者が学習することによって得る成果）と到達目標（一般目標に到達するために必要な具体的な行動）が明示されている。これらのうち，東洋医薬学関係の教育としては，「C7：自然が生み出す薬物」の項目において，薬となる動物・植物・鉱物

* 国際医療福祉大学　薬学部　学部長・教授
** 国際医療福祉大学　薬学部　准教授
***国際医療福祉大学　学長

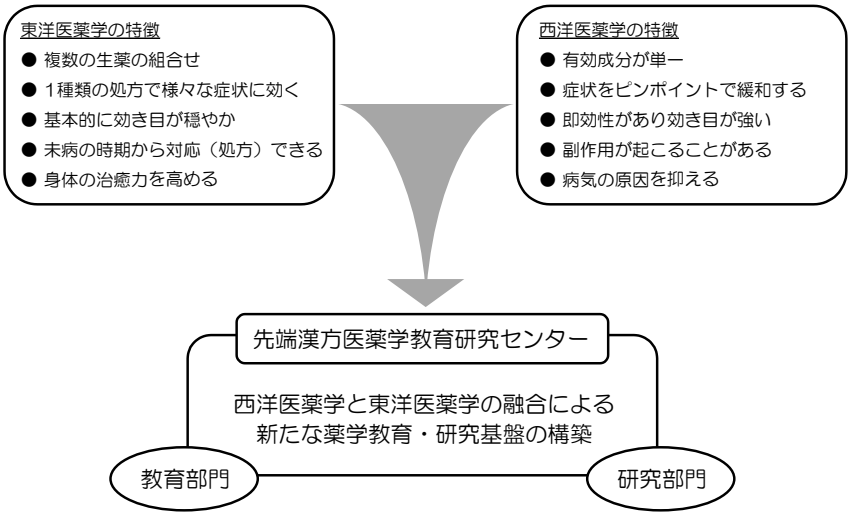

図 1　先端漢方医薬学教育研究センター設立の理念

由来の生薬の種類や性質等について学び，現代医療で使用されている生薬および漢方薬に関する基本的知識を習得することとしている。一方，各種疾患の病態生理とそれらに対する薬物治療に関する教育については，「C14：薬物治療」の項目において疾患別に目標が掲げられている。しかしながら，漢方薬の使用を初めとする東洋医薬学的な治療はこれらの項目には含まれておらず，別途制定されている「薬学アドバンスト教育ガイドライン」の中で，各大学が個性ある教育として取り上げることが促されている。以上のことを踏まえて，現在の本学薬学部におけるカリキュラムでは，東洋医薬学に関連する基礎知識とその応用について，以下に示す科目の流れに沿って学ぶこととしている。

1 年次

必修科目として「薬学概論」と「薬用植物学」を開講している。「薬学概論」では，薬学の歴史の概略や日本の民間薬としての植物に触れ，「薬用植物学」では，植物の薬用部位，薬効とその臨床的応用を学ぶ。

2 年次

必修科目としては「生薬学」，「天然物化学」，「化学系薬学実習Ⅱ」を開講している。また，選択科目としては，「薬の歴史学」を配置している。「生薬学」および「天然物化学」では，動物・植物・鉱物由来の生薬に関する知識を漢方医学につながる形で学び，「化学系薬学実習Ⅱ」では，実際に植物の薬効成分を抽出する実習を行う。また，「薬の歴史学」では，日本と西洋の薬，中国と日本の薬，欧州の医療人養成など，国際薬学史を歴史とともに展望する講義を実施している。

3 年次

必修科目として「化学療法学」を，選択科目として「一般用医薬品概論」を開講している。「化学療法学」では，病原微生物や悪性新生物に対する生薬（植物成分を含む）の作用を学ぶ。「一般用医薬品概論」では，セルフメディケーションの視点から漢方製剤に関する講義を行っている。

4 年次

選択科目として，「東洋医学概論」と「漢方医学」を開講している。両科目では，天然生薬や漢方薬を使用する医療の母体である「中医学」に関する基礎知識として，基礎理論，各種疾患の診断方法，漢方方剤の種類と適用方法，鍼灸治療などについて学ぶ。

5 および 6 年次

必修科目として「薬物治療学Ⅲ」を開講している。本講義では，臨床医による漢方治療の実際の話を取り入れることを検討している。

2) 再考案

前述のように，現行のカリキュラムでも本学薬学部では各年次に東洋医薬学関連の科目が配置されているが，今後はより充実した教育体制の整備を図りたいと考えている。

まず，第一の方策としては，現行のカリキュラムでは選択科目に位置付けられている「東洋医学概論」と「漢方医学」の講義（各 15 コマ）を，必修科目に変更することが考えられる。これらの科目には，1～2 年次に修得する各種天然生薬を実際の医療に応用するための基礎知識や技能のみならず，中医学における各種疾患の診断方法，漢方方剤の種類と適用方法，鍼灸治療など，充実した教育内容が含まれている。また，現在は選択科目であるにも関わらず，多くの学生が両科目に興味を持ち受講を希望している。したがって，両科目を必修化して「薬理学」や「薬物治療学」のような既存の薬物治療関連科目とうまく連携をとることにより，西洋医薬学と東洋医薬学を融合した教育が実現できるものと考える。

次に，第二の方策としては，東洋薬学と西洋薬学の融合教育を基盤とする「医療薬学Ⅲ」の講義（15 コマ）を 5 年次に新設し，必修科目とすることが考えられる。現在，保険診療で使用できる医療用漢方エキス製剤は 150 余品目にのぼる。また，厚生労働省の「薬局製剤指針」では，漢方薬局製剤 212 処方ならびに 201 品目の製造・販売が認められている。したがって，医療現場で活躍する薬剤師にとって，漢方医療をはじめとする東洋医薬学の知識を習得することは重要な課題である。「医療薬学Ⅲ」では，4 年次の「東洋医学概論」と「漢方医学」で習得した知識のさらなる上積みを目的として，特に科学的根拠に基づいた漢方医療を実施する上で必要となる最新情報（漢方薬の服用方法，体内動態，副作用，相互作用など）を学ぶ。

2. 研究部門

漢方薬は，複数の生薬が配合された多成分系薬物であり，活性成分の相互作用で薬効が決定される点が西洋薬と異なる大きな特徴である。現在，臨床においては，数多くの疾患に対して漢方薬が用いられており，且つその有効性も証明されている。一方，証・経験に基づいて診断することや治療に関わる作用機序に未解明な部分が多いことを理由として，漢方医療に疑問を持つ臨床家が一部存在することも否めない。このような背景を踏まえて，「研究部門」では，科学的根拠に基づいた漢方医療の推進を目的とした基礎研究ならびに臨床研究を実施する。

現代社会はストレス社会とも呼ばれるように，日常，多種多様なストレス状況に曝される環境下にある。また，このような社会的背景に起因して，うつ病をはじめとするストレス性精神疾患の罹患率は年々上昇の一途をたどっている。現在のうつ病治療においては抗うつ薬を用いた薬物治療が中心となっているが，既存の抗うつ薬の治療効果の発現には数週間の服用が必要であり，患者に服薬コンプライアンスを維持させることに苦労することが多い。さらに，うつ病患者の 20～30%は現在の薬物治療では奏効しない難治性であることから，より有効性の高い治療戦略の開発が望まれている。したがって，本センターの研究テーマの 1 つとしては，精神科ならびに心療内科領域で使用される漢方薬（半夏厚朴湯，抑肝散など）に着目したいと考えている。

また，現在我が国では，国民の 2 人に 1 人ががんに罹患し，3 人に 1 人ががんで亡くなっている現状にある。したがって，今やがんは国民病であり，がんへの対策は国策として位置付けられている。実際に，2007 年 4 月には「がん対策基本法」が施行され，基本的施策としては「がんの予防および早期発見」，「がん医療の均てん化の促進等」，「研究の促進等」の 3 点が掲げられている。さらに，本法では，がん患者の状況に応じて疼痛等の緩和を目的とする医療が早期から適切に行われること，いわゆる緩和医療の重要性も明記されている。すなわち，我が国のがん対策は新たな時代の幕開けを迎えていると言っても過言ではない。したがって，本センターの 2 つ目の研究テーマとしては，がん治療ならびに緩和医療領域で使用される漢方薬（大健中湯，六君子湯など）に関する研究を推進する予定

である。

尚，具体的な研究テーマは，本学各学部・学科および各研究センター，ならびに本学附属病院（国際医療福祉大学病院，国際医療福祉大学三田病院，国際医療福祉大学熱海病院，国際医療福祉大学塩谷病院など）を中心に公募し決定することとし，第 1 回の公募は本年 4 月に実施した。研究成果については，研究成果報告会や関連学会等において，学内外に積極的に公表していく予定である。

Ⅲ.「先端漢方医薬学教育研究センター」開設記念市民公開講座の概要

定期的にセミナーや市民公開講座を企画し，一般市民に対して現代医療における東洋医薬学の教育・研究の意義や重要性を啓蒙していくことも，本センターに課せられた重要な責務である。このような活動の一環として,「漢方薬の魅力－西洋医学と東洋医学の融合による新たな医療の道－」をメインテーマとした「先端漢方医薬学教育研究センター」開設記念市民公開講座を，昨年 12 月に本学大田原本校にて開催した。以下に開催概要示す。

「先端漢方医薬学教育研究センター」開設記念市民公開講座を，昨年 12 月 12 日（土）に，本学大田原本校の F101 大講義室にて開催した。今回の市民公開講座の目的は，大田原市民をはじめ大田原本校近郊の皆様に，本学薬学部に西洋医薬学と東洋医薬学を融合したより良い医療を目指した教育・研究センターが開設された事を周知して頂くとともに，日常の健康維持や病気療養に役立つ漢方医療の情報を提供することであった。メインテーマは「漢方薬の魅力－西洋医学と東洋医学の融合による新たな医療の道－」とし,「アンチエイジング」および「消化器系疾患」を主題とした基調講演 2 題と,「がん疾患」を主題としたトークショーを企画したが，当日の参加者は一般市民に本学の教職員と学生を加えて 200 人を超え，無事盛会裡に終えることができた。

メインテーマ：　「漢方薬の魅力－西洋医学と東洋医学の融合による新たな医療の道－」
日　　時：　2009 年 12 月 12 日（土曜日）
会　　場：　国際医療福祉大学 F101 大講義室
プログラム：

開会挨拶	北島　政樹（国際医療福祉大学　学長）
教育研究センターについて	武田　弘志（国際医療福祉大学　薬学部長）
基調講演 I	「漢方薬とアンチエイジング」 福澤　素子 （表参道福澤クリニック副院長， 慶應義塾大学漢方クリニック非常勤講師）
基調講演 II	「漢方薬と消化管機能～大建中湯は胃腸を癒やす～」 川崎　成郎 （国際医療福祉大学准教授， 国際医療福祉大学病院外科副部長）
トークショー	「西洋医学は末期ガンに有効か？～漢方の可能性を考える」 黒岩　祐治 （ジャーナリスト，国際医療福祉大学大学院教授， 元フジテレビキャスター） 天野　暁（リュウイン） （東京大学食の安全研究センター特任教授， 日本未病医学研究センター所長）

プログラムとしては，はじめに北島学長より開会の挨拶とともに，西洋医薬学と東洋医薬学に関わる歴史的背景や，学長ご自身が推進されている漢方医療に関する国際共同研究の実際などについてご紹介頂いた。その後引き続いて武田が,「先端漢方医薬学教育研究センター」の開設の経緯と教育・研究組織の概要，さらには本センターにおける事業の目標や将来展望について解説した。

基調講演Ⅰでは「漢方薬とアンチエイジング」と題して，表参道福澤クリニック副院長の福澤素子先生にご講演頂いた。福澤先生は，幼少の頃からお父様やおじい様が漢方治療に携わる環境でお育ちになったこともあり，学生時代から漢方医療について精力的に学ばれ，慶應義塾大学病院漢方クリニックの設立にご尽力された先生である。現在も日常の診療において漢方薬を積極的に取り入れた治療を実践し，漢方医療の普及に努められている。当日のご講演では，メタボリックシンドロームに対する漢方薬治療は動脈硬化の予防に有効であり，ひいてはアンチエイジングにつながることなど，今後ますます加速するであろう高齢化社会における漢方医療の魅力についてお話頂いた。

続いて，基調講演Ⅱでは「漢方薬と消化管機能～大建中湯は胃腸を癒やす～」と題して，本学准教授・本学附属病院外科副部長の川崎成郎先生にご講演頂いた。大建中湯は，消化管の収縮や運動を促進させる作用を有することが知られており，近年では消化器系術後における早期回復効果が証明されるなど，今日の消化器系医療において重要な位置を占めている漢方薬である。川崎先生は，大建中湯に関する臨床研究や基礎研究に長年携わっておられ，今回の講演では，腸閉塞医療における大建中湯の有効性を中心にお話し頂いた。大建中湯が血行を改善して消化管の収縮を促進することを証明した実験データをお示しになるなど，エビデンスに基づいた漢方医療の実際について紹介された。

また，2 つの基調講演終了後では，本学大学院教授の黒岩祐治先生と東京大学食の安全研究センター特任教授の天野暁先生によるトークショーが行われた。「西洋医学は末期ガンに有効か？～漢方の可能性を考える」と題されたトークショーでは，がんを患われた黒岩先生のお父様の病状経過と苦悩，黒岩先生と天野先生との出会い，天野先生の漢方医学的な診断・治療によりもたらされた奇跡的な回復，末期がんであるにもかかわらず安らかに息を引き取られた最期など，漢方医療に秘められたがん治療における大いなる可能性が実体験に基づいて紹介された。現代の西洋医薬学的な医療は，例えば各種治療薬の作用機序が明確であることなど，科学的な根拠（エビデンス）に基づいて実践されている。しかしながら，がんをはじめとする様々な疾患に対して，西洋医薬学的な医療が万能でないことも周知の事実である。今回紹介された黒岩先生のお父様にもたらされた漢方医療の奇跡は，いいかえれば現在のがん治療では成し得ていない新たな治療法の可能性を期待させるものである。西洋医薬学と東洋医薬学の融合による新たな医療の必要性を痛感させられる，まさに「先端漢方医薬学教育研究センター」開設記念にふさわしいトークショーであった。

今回の基調講演ならびにトークショーでは，いずれの内容に対しても会場の一般市民の方々から多くの質問が挙がり，漢方医療に対する多大なる興味と期待がうかがわれた。今後も一般市民の要望に応えるべく，定期的に魅力的なテーマを取り上げた講演会や市民公開講座を実施していきたい。

Ⅳ．おわりに

以上，この度本学薬学部に開設された「先端漢方医薬学教育研究センター」における教育・研究活動の展望と，本センターの開設を記念して開催した市民公開講座の概要について紹介した。今後，本センターにおける教育・研究活動によりもたらされる業績が，エビデンスに基づいた西洋医薬学と東洋医薬学との融合による新たな医療の実現の一助となることを期待して本稿を終える。